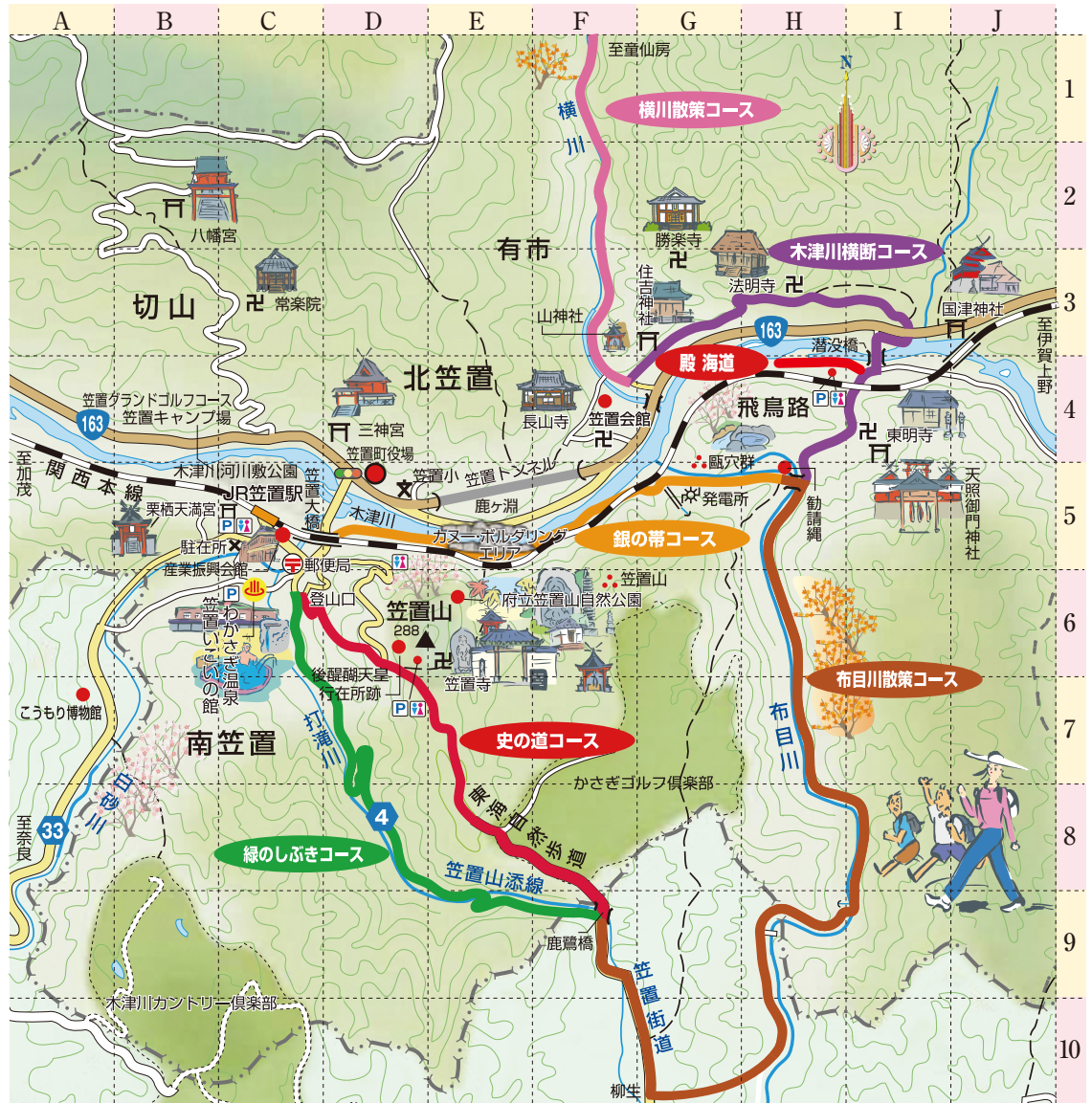


笠置町

Kasagi Town

自然とのふれあいハイキングコース



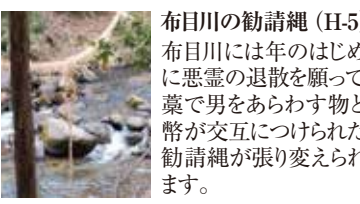
布目川 散策コース
 飛鳥路から柳生町まで 距離：5km
 時間：60分（見学時間を含まず）
 飛鳥路→勸請縄→布目川沿い→柳生



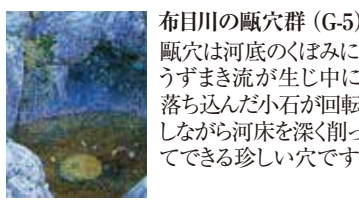
銀の帯コース
 JR笠置駅から飛鳥路まで 距離：4km
 時間：60分（見学時間を含まず）
 JR笠置駅→笠置大橋→木津川南岸沿い
 →発電所→甌穴群→勸請縄→飛鳥路



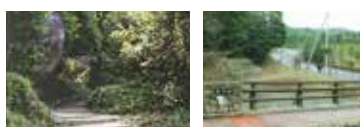
史の道コース
 JR笠置駅から鹿鷲橋まで 距離：4km
 時間：60分（見学時間を含まず）
 JR笠置駅→笠置山登山口→旧登山道
 （東海自然歩道）→笠置山→鹿鷲橋→柳生



布目川の勸請縄 (H-5)
 布目川には年のはじめに悪霊の退散を願って藁で男をあらわす物と幣が交互につけられた勸請縄が張り変えられます。



布目川の甌穴群 (G-5)
 甌穴は河底のくぼみに、うずまき流が生じ中に落ち込んだ小石が回転しながら河床を深く削ることができる珍しい穴です。



笠置山登山道 (C-6) 鹿鷲橋 (F-9)

東海自然歩道は、東京の明治の森・高尾国定公園と大阪の明治の森・箕面国定公園を結ぶ自然歩道です。その延長は約1,698キロメートルにおよび、昭和49年春に完成しました。京都府内の総延長は157.1キロメートルで、豊かな自然や多くの文化財にふれながら、京都市、宇治市、宇治田原町、和束町、南山城村、笠置町の2市3町1村を通過しています。

笠置町

Kasagi Town

農村地域の暮らしぶりとは伝統行事の継承

ライフラインのない時代、農民の生活は自給、自足の生活である。

労働時間は、夜明けから日没まで朝飯前という言葉があるように、外が明るくなったら朝食の前までに一仕事を済ませて、食事をする。その後は、山仕事や畑仕事、炭を焼く事も仕事である。現在の様にガスなどと言う便利なものはなく、山で伐採した薪・柴などを燃やし暖をとったり、ガスの替りをしてくれる。

食糧は、田んぼで米をつくり、畑で野菜を作り、動物蛋白は各家庭に鶏を飼いそれを食糧にする。実際には、来客の時とかお祭り等祝い事などにしか農村では食べる事ができなかった。

もちろん現金収入にするのも、米・野菜等売りそれを収入に現金をもらう事になる。

労働時間にすれば長く企業であればブラック企業もはなはだしい時代である。夕食を済ませても男性は藁仕事をしたり女性は縫い物や編み物をする。いわゆる夜なべである。

このような生活の中で若い者はそのまま農民の生活をしていては現金収入や現代の生活から掛け離れると思えば次第に外に働きに行くようになる。現在は農村を守って来た人達は高齢になり田・畑は休田・休畑が多くなり、山仕事をする人も全くと言ってよい程いなくなっている。

伝統行事の継承での問題点は何より人口の減少である。少子高齢化及び若者の町外への転出。飛鳥路区内の行事を行う者は65才以上の高齢者である。現在区内に居る者全員で保全等をしている。そのため勧請縄行事の時は最低14~15名の人員が必要となる。飛鳥路出身者及び笠置町内外の方に協力を願っている。現在は総勢30名位で、にぎやかに勧請縄作りをしているが一番の問題は継承者の育成である。

笠置町

Kasagi Town

飛鳥路地区の年間行事と人口推移

飛鳥路の年間行事

1月2日 (元旦祭)

天照御門神社 新年祭 (神事) 午前9時より
東明寺 乱杖 (おこない) 午後1時30分より
※昔は1月3日午後1時より平成10年頃より変更

1月5日~10日

天照御門神社 勧請縄作り 午前8時開始
※昔は1月7日午前8時より現は上記の通り

1月吉日 (成人の日)

本来は小正月1月15日に村境の道祖神場(さえのかみば)などで行う火祭り。門松、竹、しめ縄などを集めて焚く。どんどやき

6月10日 (前後)

布目川ホテル鑑賞会 平成26年より開始
※町内及び町外の子供対象

8月19日

東明寺 地藏盆 (19夜さんと呼ぶ) 午後3時より

10月 第2日曜日

天照御門神社 秋祭 (神事)
※昔は10月16日

【飛鳥路区内保全及び清掃】

保 全…水路の点検 4月初旬

草刈り…南大河原～飛鳥路～柳生
飛鳥路～笠置公園 6月、10月に実施

清 掃…天照御門神社・東明寺は毎月末に
当番の者2名で境内清掃
新年の準備として天照御門神社は
宮守・東明寺は正権の者がする。

飛鳥路の人口

文献によると江戸中期 (1760年頃) ————— 60戸 247名
※現在の墓地より高台50m位の場所に多数の石仏があり年代が読み取り困難が多い

昭和35年 (1960年) ————— 20戸 93名

平成30年 (2018年) ————— 7戸 16名

【飛鳥路区内の組分け】西組・東組・浜組

飛鳥の荘六村(江戸時代)柳生藩

▪ 飛鳥路村 ▪ 北大河原 ▪ 南大河原村 ▪ 田山村 ▪ 高尾村 ▪ 野殿村の六村である。

六村のリーダーは飛鳥路村である。

笠置町

Kasagi Town

飛鳥路の歴史

古代～中世～近世～現代 日本の古い歴史が息づく、自然に恵まれた町の歩み

- 859（貞観元年） 5月28日 飛鳥村氏神天神社に山城国政住上天照御門神並に従五位下（現、天照御門神社）飛鳥路に祭祀
- 1233（天福元年） 東明寺（現飛鳥路）の大般若経校合
- 1416（応永23年） 東明寺大般若経補写
- 1549（天文18年） 大般若経、飛鳥路神宮寺（東明寺）にて信読
- 1729（享保14年） 現飛鳥路（山城国高八郡村名帳）によると石高16777石 柳生藩領
- 1772（安永元年） 10月 飛鳥路村と笠置村が船浜で争論をおこす
- 1871（明治4年） 7月 廢藩置県、南笠置、北笠置、切山、下有市、上有市は津県、飛鳥路は柳生県
11月 上記六カ村が京都府に編入 笠置郵便局創設
- 1879（明治12年） 3月 京都府が郡、区町村割を実施
12月 第8組設置（切山、笠置、有市、飛鳥路の四ヶ村）
- 1883（明治16年） 10月 有市、東部、飛鳥路に分校を新設
- 1884（明治17年） 6月 聯合戸長役場（笠置、切山、有市、飛鳥路の四ヶ村）設置
- 1887（明治20年） 7月 学校令が制定される。笠置小学校は笠置尋常小学校と改称、
（南笠置、北笠置、切山、上有市、下有市、飛鳥路）
- 1889（明治22年） 4月 市制、町村制が実施され（笠置、切山、有市、飛鳥路）笠置村設定
- 1892（明治25年） 4月 飛鳥路分校廃止される
- 1898（明治31年） 11月 関西鉄道開通（加茂～奈良間大仏線開通）
- 1907（明治40年） 関西水力電気株式会社布目川に第2発電所設置（工期明治38年～明治40年）
- 1922（大正11年） 東明寺大般若経全巻のうち38帖を奈良国立博物館へ寄託
- 1934（昭和9年） 1月 笠置村に町制が施行され笠置町となる
- 1957（昭和32年） 潜没橋完成・開通
- 1963（昭和38年） 10月 天照御門神社の大鳥居井上義雄氏献生
- 1864（昭和39年） 庄屋庄七石塔顕彰会
- 1983（昭和58年） 2月 飛鳥路集会所竣工
- 1986（昭和61年） 飛鳥路東の坊で銅造聖観音座像発見される
- 1998（平成10年） 3月13日 飛鳥路勸請縄 京都府登録無形民俗文化財指定
- 2000（平成12年） 3月17日 京都府書跡文化財指定 飛鳥路東明寺の大般若経588帖
奈良国立博物館及び山城郷土資料館へ寄託
- 2011（平成23年） 1月 2日 東明寺落慶法要
- 2017（平成29年） 8月21日 京都府有形民俗文化財暫定登録
飛鳥路東明寺の牛玉、札、用具一式五点

笠置町

Kasagi Town

飛鳥路の勧請縄行事

飛鳥路は、木津川の南岸に位置する14戸の集落である。ここでは、毎年1月7日、区民が合同して勧請縄行事を行っている。

行事の中心となるしめ縄作りは、基本的に各戸から一人ずつ出て作ることにしている。朝8時、天照御門神社にしめ縄の材料であるモチワラを持ち寄って集合すると、宮守が材料を御祓いしてから、手分けして勧請縄作りにとりかかる。勧請縄は、直径約20cm、長さ約40mと太くて長いものと直径約3cm、長さ約30mと細くて短いものを2本作る。

飛鳥路の勧請縄の大きな特徴は、縄に各種のツクリモノをぶらさげることである。ツクリモノは、わら製の男根、房一對、ナベツカミー一對、五徳と木製の農具（鋤、鍬、鎌）のミニチュアである。太い方の縄作りは時間がかかるので、細い方の縄作りが終わった人々がわら製のツクリモノを作ることになる。

一方、神社前のトンドバヤシと呼ぶ場所にしめ縄作りを一時中断し、30cm四方の祭壇を作り、祭壇が出来上がると、青竹で7本の的を作り、的の端部には東西南北天地鬼の語句を一字ずつ墨書した半紙をはさんだ的をたてる。的ができると弓にかかり、竹を半月形に曲げてわら縄で括り弓とする。

準備が終わると祭壇にお祈りし、東西南北天地鬼の順番に、東の的は東へ、西の的は西へ、的に挟んだ文字の方角に向けて実際に的を射る。（奉射）

鬼の的をめがけて射るが、これは弓矢で鬼を打ち山に入っても災いが降りかからないように鬼を退治するのだという。鬼を射た後は祭壇に再度お祈りし、一気に祭壇を弓で壊すと終了で、しめ縄作りへ合流する。これはいわゆる奉射であるが、地元ではこの行事のことをヤマノカミと呼んでいる。

午前11時頃、縄作りが完成すると布目川まで運び、太い方は布目川の本流に、細い方は支流にかけていく。太い縄は川にかける途中、一定の長さまでくるとまずケサをとりつけ、適宜ツクリモノをぶらさげている。



勧請縄

勧請縄 所在地：笠置町大字飛鳥路
文化財指定：平成10年3月 京都府登録無形民俗文化財

最後にまたケサをとりつける。ケサは水引を模したもので、清めの意味があるという。細い縄をかけるときは、一定の間隔で紙で作った御幣をつけていく。

（24枚で24節気からと思われる）

両方の勧請縄をかけおわると、宮守が2本の縄をくくりつけた大木の根元にお神酒、御飯、鯛2匹を供える。宮守はお神酒をまいて周囲を清めた後、木に向かって区の安全をお祈りして行事は終了となる。

布目川は南から北に流れるが、地元では北に流れる川は村の財産を持っていってしまうため、村の財産が流されないよう勧請縄をかけるのだという。また、勧請縄は洪水で村が流されないためだとか、福が流れてきたときに下に流れていかないように、飛鳥路に留まるようにかけるのだともいっている。

飛鳥路の勧請縄行事は、年頭にあたり除禍招福を願う勧請縄と奉射が一体となって行われるものである。南山城地域には勧請縄行事が濃密に分布するが、そうした中で飛鳥路では、勧請縄に様々なツクリモノをぶらさげるところに特徴があり、勧請縄と並行して山仕事の安全を祈る奉射も行われるなどの内容を揃えており、資料的価値が高く貴重である。

用語説明

【勧請縄の勧請とは】

①神仏の来臨を請うこと ②神仏の分霊を請じ迎えまつこと

【奉射】

悪霊をはらい豊作祈る行事 射損すれば不吉とした

【しめなわ（標縄 注連縄 七五三縄）】

しめは占めるの意、材料は餅米の藁
神前又は神事の場に不浄なもの侵入を禁ずる印として張る縄
一般には新年に門戸に又は神棚に張る左捻り定式とし、三筋・五筋・七筋と順次に藁の茎を捻り放して垂れ、その間々に紙垂（かみしで）を下げる。輪じめ（輪飾り）はこれを結んだ形である。

（京都府の文化財第16集より抜粋）※一部、削除あり

笠置町

Kasagi Town

飛鳥路と古代信仰

笠置町飛鳥路の天照御門神社と東明寺の大般若経の謎

笠置町飛鳥路は、大和国高市郡の飛鳥古京と同じ名をもつ小集落である。ここには、平安時代の初期に、従五位下を賜った天照御門神社があり、同社の神宮寺である東明寺に、天平中期に書写されたものを含めて、大般若経六百巻が所蔵されている。

ここでは、天照御門神社と東明寺大般若経についてその謎を明らかにすることが私に与えられた課題である。

現在、天照御門神社は、九頭龍神社、八王子神社、天照御門神社、春日神社の四社である。九頭龍神社は一抱え程の小さい石が神座であり、他の三社は春日造りの小社殿である。

天照御門神社の最も古い記録は、次に掲げる『日本三代実録』所収のものである。

(資料1)「貞観元年(859)五月二八日山城国従五位下大川原国津神有市国津神正六位上天照御門神並従五位下」(『日本三代実録』)つまり、貞観元年(859)に従五位下の位を賜っていることがわかる。ところが、その後この神社が文献上に登場するのは、はるか後世の江戸時代の地誌である。

(資料2)『日本輿地通志』畿内部卷第十、山城之十、相楽郡(1736年)「天照御門神祠ハ貞観元年五月、従五位上ヲ授ケラル。○飛鳥路村ニ在リ。今、天神ト称ス。僧舎有リ。東明寺ト号ス。」

(資料3)『山城名跡巡行志』第六(1754年)「飛鳥ノ莊六村ハ、飛鳥路、北大河原、南大河原、田山、野殿、高尾ナリ。○天照御門神祠ハ、当村ニ有リ。今ハ天神ト称ス。宮寺ヲ東明寺ト号ス。」

この『日本輿地通志』と『山城名跡巡行志』から、天照御門神社は、江戸時代の1754年頃の間は、天神社と呼ばれていたことがわかる。

ところが、同神社の棟札のによると最も古い、享保9年(1724)6月17日のものであるが、これによると、当神社は正式には「天満大自在天神」と呼ばれており俗に天神社と称されていたことがこれによって明らかである。以降の棟札も同様な名称であるが、明治36年(1903)10月15日の棟札が天照御門神社と名を改めていることから、この名称が正式名称として掲げられるようになったのは、この明治36年か、それよりも古くない時期かと思われる。

(近世以降のこの神社史について当社に現存する棟札からの詳細な研究が残されています。)

以上が、文字として残されたこの神社の全てである。これらの資料を手掛りに、地理的条件を念頭におき、神格の比較検討の中からある程度妥当性のある推論をしていきたいと考えるのである。

私が与えられたもう一つの課題は、神宮寺である東明寺の大般若経の謎である。これについては、奈良国立博物館の西山厚氏が、第4章で詳細な報告をされ考察を加えられている。

私は、この大般若経のうち「天平期・肥後国合志郡史生の写経本」の伝来の謎について、少々推論めいた仮説を提示したいと考えている。同資料を次に掲げることにした。

山田方見ノ母ノ願経

(輿跋云)山田方見ハ肥後国ニ住セシ史生ニシテ、天平十五年歳次 癸 未八月

笠置町

Kasagi Town

笠置の史跡に心をまかせて

天照御門神社

天照御門神社は四社からの総称 春日神社・天照御門神社・八王子神社・九頭龍神社

天照御門神社は天照という太陽信仰と御門という御門神信仰の習合したものである。

(習合→それぞれ異なった教義・主義などを総合調和すること)

春日神社・八王子神社・九頭龍神社は龍神神仰である。龍神神仰は雨・水の神である「日本三代実録」によると貞観元年(859)に従五位下の位を賜っている。

天照御門神社は享保9年(1724)頃から「天満大自在天神」と呼ばれ俗に天神社と称されていた。

天照御門神社と正式名称として呼ばれるようになったのは明治36年(1903)頃と思われる。



天照御門神社

東の坊 銅造聖観音座像

この仏像は右手は膝に伏し左手は蓮華をとる形の銅造りで像高は18cmの聖観音座像である。

火災にあい、長く土中に埋もれていたため、その当時の尊容は著しく損なっている。

この像は三方に花形の宝形をつけ、中央に化仏を配している。張りのある肉付きのよい面顔・体軀や膝がまえて太造りで古様さを表している。

宝冠や胸飾り衣丈の刻みなどその尊容から中国の宋(南宋)の時代の作とも思われ、背面の形からみると高麗時代の作とも考えられる。

製作は恐らく中国で宋の時代と考えられ12~13世紀頃であると思われる。

この時代の作は我が国に招来されているものが少なく珍しい逸品である。



(火災、像の製作された時代は不明)

笠置町
Kasagi Town

笠置の史跡に心をまかせて

東光山 東明寺

天照御門神社の北隣に位置しており、古くは奈良時代から室町時代までの写経の記録がある東明寺は、天照御門神社の神宮寺として建立される大覚寺派のお寺である。周辺には大覚寺派の寺院がなく、特異な存在である。

東明寺の開創は不詳であるが、1549年には存在したことは史料から判明している。

このお寺を知らしめているのは、京都府文化財に指定されている〈大般若経〉であり、東明寺には、588帖が伝存しており、大正12年に内38帖が奈良国立博物館に、残りの550帖は飛鳥路の人々に守られ東明寺で保存されていたが、のちに京都府立山城郷土資料館へ寄託された。



現建物は平成22年8月26日上棟 平成23年1月2日落慶法要



東明寺 石造物全景



阿弥陀如来立像



薬師如来座像



十一面観音立像



弘法大師像

笠置町

Kasagi Town

笠置の史跡に心をまかせて

東明寺の乱杖

毎年1月2日(昔は1月3日)に東明寺で行う乱杖(らんじょう) (乱杖=おこない)

区民全員が集まり僧侶のお経45分位おこなわれる。その間20分程の時、30分程の時、40分程の時、僧侶が立ち上がり錫杖(しゃくじょう)を振り、乱杖と大声で告げる。それを合図に仏前の両側に座っている各家の長及び縁側に居る者全員で柳で作った桴(ぶち)で板をたたくと同時に法螺貝(ほらがい)2個吹鳴・大太鼓の乱れ打ちをする。

この行事は作物につく害虫の追い払いである。

昔は牛玉・札は版木で刷って宝印を朱で押して柳の板に挟んだ旗を区全戸に餅と共に配り、各家の苗代に供えた。

1722年に牛玉札用具ができ、乱杖が行われたと思われる。



東明寺



1月2日に行われる乱杖の様様

牛玉札用具



2017年(平成29年)8月21日
京都府有形民俗文化財暫定登録
飛鳥路東明寺の牛玉・札・用具一式玉点

- ◇ 版木(東明寺の印形)
たて24.8cm 横23.0cm 厚さ4.0cm
1722年 享保7年 丑寅正月吉日 作製
- ◇ 朱肉
長さ32.0cm 幅13.4cm 厚さ6.0cm
1736年 享保21年 辰正月 作製
- ◇ 宝印
①9.0cm×4.0cm ②7.5cm×7.2cm×2.4cm
- ◇ バレン

笠置町

Kasagi Town

笠置山行場巡り

笠置寺は山寺。1周800mの修行場巡りは別世界。

奈良時代に南都僧侶が修行された山道は遊歩道として整備され、驚きと発見をともなう自然を楽しむコースとなりました。四季折々の笠置山をお楽しみください。



A 千手窟

東大寺大仏殿建立のため良弁和尚が千手の秘法を行い、一大事業を成し遂げられました。実忠和尚はこの隠穴から弥勒の世界に至って、観音悔過法を学ばれました。



B 後醍醐天皇行在所・もみじ公園

行場巡りもいよいよ終わり。山頂へと続く階段を登ると、後醍醐天皇の行在所跡です。眼下には80本を数えるもみじ公園。春には青もみじ、秋には錦に彩られます。



1 笠置石

「笠置」の地名の由来。天智天皇の皇子が「笠を置かれた石」なので笠置石です。



2 正月堂

観音悔過法の会湯として、東大寺実忠和尚によって建立された御堂が起源。「お水取り」発祥の場です。



3 虚空蔵石

岩肌に刻まれた9mの仏像は、記憶力がよくなるというご利益のある虚空蔵菩薩さま。元弘の兵火に焼かれず、お姿をとどめています。



4 胎内くぐり

修行場のスタート。岩の洞窟を母胎にたとえ、通り抜けることによって生まれ変わるとされました。



5 ゆるぎ石

元弘の戦乱において武器として使われた岩の残りは、端を押すとゴトゴトと動きます。



6 太鼓石

重なる巨石。丸くはがれている部分の右脇をたたくと「ポンポン」と鼓のような音がします。



7 弥勒磨崖仏

高さ15mの巨石に刻まれた仏は「天人の作」と伝えられ、元弘の戦乱の兵火を最後に焼亡したと言われています。



8 解脱鐘

蓮の花をモチーフに底部に六つ切りの切込みが施された釣鐘。重要文化財に指定されています。